

本気の文化による町作り

— 豊岡市の挑戦 —

劇作家・演出家 平田オリザ

若者人口の減少に どう対応するか

私の本業は劇作家・演出家で、演劇の創作が仕事ですが、諮問委員に就いたり、文化政策を大学などで教えたり、自治体の政策づくりもお手伝いしています。最近では人口減少対策についての講演依頼が多くなりました。

スキー人口を例にお話しします。スキー人口は、平成に入り20年間で3分の1に激減しました。スノーボード人口は増えていますが、合算してもかつての半分以下です。深刻なのは若者たちの可処分所得の減少です。テニス人口も海水浴人口も減っています。一番の理由は若者人口の減少です。平成に入り20年間だけで約1,000万人減です。観光学者や統計学者は「若者人口が減ったからスキー人口が減った」と言います。しかし私は、「スキー人口が減ったから若者人口が減った」と解釈しています。

1980年代、スキーは男子が女子を1泊旅行に誘える機会でした。機会が減ることは人口減少につながるでしょう。ジャズ喫茶やライブハウス、古本屋、画廊、写真館など、男女の出会いの場は少なくなりました。では、どうすればいいかという視点から話を進めます。

子どもが欲しい地域では、非婚・晩婚化への対応が重要です。人口減少対策という視点でいうと、地方の対応策は結婚してもらうことに尽きます。フランスのように、結婚しなくても自由に子どもを産める環境を保障していく手法もあるでしょう。

地方の女性が「出会いの場が少ない」と語っていました。高校生は入学時に偏差値で輪切りにさ

れ、階層化されます。統計上、女性は自分より低い学歴の男性とは結婚しない傾向にあります。一方、男性の4分の1は生涯結婚しません。しかも地方ほど率が高いのです。交流の流動性を高める工夫が必要ですが、ネックはコミュニケーション不足だと思います。

地方出身のゼミ生から、仕事がないから帰らないといった声は聞いたことがありません。東京や大阪で楽しい生活を知ると「もう帰れない」のです。私は首長さんたちに「面白いまち、出会いがあるまちをつくるしかない」と話しています。

求められる大学入試改革

私は小中学校の国語の教科書をつくる手伝いをしてきたこともあり、年間30~40校で授業を行っています。演劇的手法を使ったコミュニケーション教育は、今、広がりを見せています。市内全ての小中学校で導入する自治体もあります。

思考力、判断力、表現力の向上は昔からあるテーマですが、最近、言われ始めたのは、主体性、多様性、協働性をはかるような試験です。しかしどうやってはかるのでしょうか。主体性と協働性は、ときに相反するテーマです。

私は今、香川県にある四国学院大学で学長特別補佐をしています。大学は生き残りをかけて、3年ほど前から改革に取り組み始めました。入学試験でどんな問題を出すかも公表しています。例えば、レゴ（ブロック玩具）で巨大な艦船をつくるという問題があります。8人1組で設計図を描いて、役割分担、作業手順を決めて作業し、地道な

平田オリザ (ひらた おりざ)

略歴

1962年東京生まれ。1995年「東京ノート」で岸田戯曲賞、2019年『日本文学盛衰史』で第22回鶴屋南北戯曲賞を受賞。同年秋より兵庫県豊岡市日高町に移住し、2021年より兵庫県立国際観光芸術専門職大学（仮称）学長に就任予定。

こまばアゴラ劇場芸術総監督、城崎国際アートセンター芸術監督、劇団「青年団」主宰、大阪大学特任教授、東京藝術大学特任教授、四国学院大学客員教授などを務める。



手作業もいとわない姿勢を見えています。自分の主張を論理的に具体的に説明できたか、タイムキープを意識し、議論をまとめることに貢献したかなどから協働性も見ます。

さらに私は、大阪大学で書類選考した40人を2泊3日ホテルに缶詰めにして、演劇や映画をつくらせたり、光の性質を説明するための紙芝居をつくるといった試験も実施してきました。教員たちには『『宇宙兄弟』という漫画を全巻買って読んでください』とお願いしました。JAXA、NASAの宇宙飛行士を選抜し、育てていくという漫画です。

従来型の学力試験というのは、知識や情報の量をはかって、下位者は線引きされて不合格です。JAXAやNASAの試験は違います。命のやり取りができるクルーを集める試験なのです。共同体がピンチのときにジョークを言って和ませられる、斬新な意見でピンチを切り抜けられるかなどを観察します。要は仲間をつくることのできるような能力試験が必要です。

大学の試験は変わっていくと考えています。先進的な大学ほど講義をインターネットで公開しています。知識や情報は世界中からも得られます。それでも共に学ぶことが大事だと私は思います。何を学ぶかよりも、誰と学ぶかが重要です。

今、最も改革が進んでいる国立大学は東京工業大学だと思います。1年生の教育をしっかり行い、20人1クラス編成で担任をつけて、毎週のように読書会、ディスカッションをしています。理系ほどリベラルアーツが必要だという認識は、世界標準になっています。ただ、東工大には悩みがあります。「8・7・6問題」と呼ばれていますが、

学生の8割以上が男子、7割が関東出身、6割が中高一貫校出身です。ディスカッションでは、みんな同じ意見になってしまいがちです。

アメリカには、従来型の学力で採るのは上位2割、下位2割は寄付金の額に応じて入学できるという私大があります。寄付金を基金にすれば貧しい学生を丸抱えできます。経済的に様々な層がいてくれないと、きちんとしたディスカッションにはならないでしょう。また、地方の人、都会の人、外国人留学生、いろんな宗教、民族がいないと、国際的な大学とは言えないと思います。大学入試改革の本丸は多様性の確保にあると考えています。

日本の教育は大きな問題に直面しています。日本の教育制度は、小中学校までは市町村の教育委員会に任されていますが、高校は県立や私立になります。管轄が違えば一体型の教育ができません。東京に多く存在する中高一貫校の優位性が高まると思います。その結果、地域間格差がさらに広がる懸念があるでしょう。

東京と地方で広がる文化格差

社会学には「身体的文化資本」という概念がありますが、私はコミュニケーション能力やセンスを付け加えたいと思います。身体的文化資本は、だいたい20歳くらいまでに形成されます。

わかりやすい例は味覚です。味覚は12歳くらいまでに形成されます。おいしい物と安全なものを食べさせ続けることで味覚は育つのです。骨董品の目利きを養うには、本物だけを見せ続けることです。「この絵柄のカーブは江戸時代になかった

から、にせ物です」などと論理的な言いようではありません。身体的文化資本の本意は違うのです。ぱっと見ただけで「これはにせ物」と一瞬で判断できる能力で、幼少期から身につけていきます。

演劇など協働作業が必要になる芸術は、東京圏が圧倒的に有利です。地方に比べアクセスが違うのです。

東京都港区は、小学生6年生をサントリーホールに招待しています。サントリーとしては地域還元事業の一環です。世田谷区には「世田谷『日本語』教育特区」があり、独自の教科も用意されています。また世田谷区は、野村萬斎さんが芸術監督を務める、世田谷パブリックシアターという公共ホールがあります。ホールに依頼すると、区の子算を投じて、俳優や狂言師が小中学校に派遣され、子どもたちは音声言語活動の授業を受けます。

今、演劇やダンスを本格的に習える高校は全国で80前後あります。うち6割は東京と神奈川にあり、大阪、兵庫を加えると全体の8割を占めます。地方は鑑賞の場の確保が難しく、教える人もいません。文化格差が広がっているということです。

経済格差は教育格差と連動します。教育の格差はすぐ発見できますが、文化の格差は見つけにくい。例えば、親がコンサートや美術館に行く習慣がなければ、子どもは行きません。美術館やコンサートに行く家庭と行かない家庭とでは、文化格差が大きくなっていきます。

日本は明治以降、教育の地域間格差のない国づくりを進めました。しかし今、文化の地域間格差と経済格差という2方向に引っ張られて、子どもたち一人ひとりの身体的文化資本の格差が広がっています。

東京は小劇場、ジャズ、コンテンポラリーアートなどが多彩です。地方から東京に出てきた学生は楽しむことができますが、東京に出ていけない若者は、楽しみを享受できません。東京と地方の文化的格差は広がる一方です。地方は、文化政策と教育政策を一体にして、子どもたちに身体的文化資本が蓄積されるような、教育政策と文化政策に力を注ぐ必要があると思います。

文化政策と観光政策は 一体型で

兵庫県豊岡市に2021年4月、観光とアート（演劇、ダンスなど舞台芸術が中心）が本格的に学べる兵庫県立国際観光芸術専門職大学（仮称）が開学される予定です。私は東京藝大の教授もしていますが、藝大に演劇学部はありません。世界の先進国や東アジアでは、通常、文化政策と観光政策は一体型で行われます。日本は演劇を使ったコミュニケーション教育で、完全に後れをとっています。文化、芸術というのは、人間の暗闇や精神の揺れも扱います。「教育的」でないことを扱うのです。文科省の教育とは相反しています。文化政策と観光政策を一体型で推進できる人材を育成しようというのが、兵庫県立専門職大学のねらいです。

観光学には「大阪病」という言葉があります。大阪には万博の成功体験があり、外からの集客に頼るような政策を続けてきましたが、なかなか成功例は出ませんでした。「同心円状の集客」という言葉があります。東京ディズニーランドの年間パスポートを持っているのは浦安市民です。県レベルでも千葉県民が最もパスポートを持っています。浦安市民は全親戚や友達が来ると、地元のディズニーランドに一緒に行きます。地元の人々に愛されないと、やっていけない時代です。

大阪での最高の成功例は、寄席の天満天神繁昌亭だとされます。天神橋筋商店街の旦那衆が、2億数千万の寄付を集めて、天満宮の境内にある空き駐車場に建てたもので大ヒットしています。1回の収容数は200人程度で頑張っても年間十数万人です。しかし寄席が成功したおかげで、天神橋筋商店街の通行客は1日2万5,000人、年間1,000万人が通る元気な商店街になりました。ユニークなイベントを毎月やっています。修学旅行生に“1日丁稚体験”をしてもらおうと、旅行生に前掛けをつけてもらい、立たせておくだけなのですが、ユーモアがあります。繁盛亭の寄席がはねた後、嘶家さんたちは地元の居酒屋で飲むようになりました。商店街の若旦那集とわいわい騒いで、

出てきたアイデアは翌月にはイベント化されます。これが公共文化です。大事なことは、地域の人々の頭が活性化することです。私たちアーティストの仕事は、新しい視点やユーモアなど、地域からアイデアが出てくるよう促すことだと思います。

「水都大阪2009」という催しは、来場者100万人の予定でしたが190万人も入りました。税収だけで6億～7億円規模、一次消費だけで60億円です。

今、博覧会から芸術祭へと関心が移っています。人間は見られないもの、見に行けないものが見たいのです。それは、人間の心です。心のなかを色や形や言葉にしてくれるアートが人を惹きつけます。瀬戸内国際芸術祭では、見なれた瀬戸内海に先端的なアーティストの作品が配されました。風景の美しさを再発見できるアートです。

青森県津軽半島の港町・蟹田町は「風の町」を標榜しています。「風のまち保育園」という名前の保育園もあります。津軽半島や下北半島では、海峡を通り抜ける猛烈な風が吹きます。太宰治は『津軽』という小説のなかで「蟹田は風の町」と書きました。太宰の一文で蟹田は「風の町」になったのです。

建築物におけるアートとして最も成功したのは金沢21世紀美術館だとされます。兼六園に行く10人に9人は美術館にも足を運ぶそうです。かつて金沢は、団体客が減少し、長期低落傾向にありました。ところが2004年からV字回復、「21世紀美術館効果」だと言われています。北陸新幹線の開業もあり、観光客の数は300万人に近づいています。

文化の自己決定力を高める

今、ヨーロッパはLCC（ローコストキャリア）の時代です。ヨーロッパ圏内どこに行くにも100ユーロ（約1万円）以内で収められます。昼間、パリでエッフェル塔に上って、夜はウィーンでオペラを観ることができます。オペラ座は、毎日違う演目を上演します。レストランやホテルでは売上や雇用が生まれ、経済波及効果は年間数千億円とされています。

宿泊してもらうにはナイトカルチャーとナイトアミューズメントが必要です。家族と一緒に楽しめるような参加体験型で、ハイカルチャー、ハイスペックなものが望ましいと思います。

カジノだけで成功した街はありません。アメリカでは、ゴーストタウンになってしまった街がたくさんあります。ひとり勝ちなのはラスベガスです。要因は1980年代からスポーツとショービジネス、エンターテインメントの街につくり変えてきたからです。

国内に目を向けてみましょう。高松市では、大きなデパートが退店した建物のワンフロアを借り切って、図書館の分室、子育て支援施設、デイケアサービス、市役所の分室、ワークショップスペースを設けました。家族で来て、認知症のおばあちゃんを預けて、おじいちゃんは図書館で新聞を読む。お父さんと子どもたちはワークショップに参加、お母さんはその間、買い物です。

瀬戸内国際芸術祭でひとり勝ちしたのは小豆島です。小豆島を通らないと会場に到着できないのです。アートというのは消費を刺激する側面があって、現代アートを見た帰りに、小豆島のそうめんやオリーブなどのお土産を買って帰るのです。

北海道の富良野は、夏のラベンダーが有名ですが、もともとは観光アイテムではありませんでした。1970年代、輸入と香水原料が人工香料に変わっていく過程で、作付面積が激減しました。ところが、1軒の農家が、1年だけラベンダー畑を残しておきました。畑は旧国鉄の「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンポスターに使われ、やがて富良野プリンスができ、スキー場が整備されます。TV番組「北の国から」の放送で一挙に富良野ブームに火がつけました。富良野の方たちがすばらしかったのは、ラベンダー摘み体験、香水工場の見学、ポプリ（香草）をつくるなど、家族で楽しめる小さな参加型イベントを用意したことです。

富良野市では、全ての小中学校で演劇教育をしています。実施前、私は15年間、毎年富良野に通いました。生徒が15人ほどの中学校で授業をすると、農作業を中断して父母30人くらいが見学に来

ます。聞くと、「これからの農業は高価格、高品質の付加価値で勝負するしかない。ニーズを汲み取る柔軟性、何をつくっていくかの発想力、どう売るかの実現力・コミュニケーション能力が必要だ」と答えていました。クリエイティブ産業という自覚があるのです。

富良野高校には道内初となる演劇コースがあります。プロの演劇人を育成するのではなく、30年、50年後も農業と観光のまちを支える、表現力、コミュニケーション能力を育むのが狙いです。

今の時代、自分たちの文化、愛するもの、誇りになるもの、どんな付加価値を加えればいいのかを自分たちで決められないと、グローバル資本に収奪されます。私は「文化の自己決定能力」と言っているのですが、行政職員も地域住民も、当事者意識を持って事を考えてもらいたいと思います。文化の自己決定能力は身体的文化資本が大きく影響します。要はセンスです。一人ひとりがセンスを高めていくしかありません。

もう1点指摘します。今、公共事業だけでも地域は潤いません。かつては建設業に携わる従業員たちの消費によってまちも潤いました。しかし最近、従業員は東京資本の店舗で消費しています。また農産品だけを地産地消しても、日本人のエンゲル係数はせいぜい二十数%ですから限度があります。可処分所得をどうやって地元で落としてもらえるかが、これからのテーマになると思います。私は「ソフトな地産地消」という言い方をしています。自分たちでつくり、楽しみ、どんな付加価値を加えれば、よそから人が来てくれるか考えましょう。

文化政策と教育政策を結びつける豊岡市

さて、表題のテーマに掲げた兵庫県豊岡市を紹介します。豊岡市は但馬地域の中核都市で人口は8万人ほどです。

豊岡を一躍有名にしたのは、コウノトリの復活・再生でした。コウノトリが絶滅した地が豊岡だったこともあり、復活機運が高まりました。県

の協力などもあり、今100羽以上が飛んでいます。コウノトリは、田んぼにフナ、カエル、ドジョウなどがいないと生きていけません。市は農家を説得して、無農薬、減農薬の田んぼを増やしてきました。お米は「コウノトリ育むお米」としてブランド化、高値で流通しています。「経済成長と環境保全の両立」だと市は語っています。

市内には円山川という流れの緩い川があり、ボートコースにもなっています。2020年のオリンピックではドイツチームが合宿に使う予定です。また、城崎中学校には日本一のボート部があるそうです。ドイツチームと交流するでしょうから、子どもたちにとっていい体験になると思います。ドイツチームが合宿の地に決めたのは、温泉がある、無農薬の食材が安定して供給できていることだったようです。これは海外観光客にとっても最も重要なポイントです。城崎温泉はよく知られた温泉地で、流れる大谿川の川沿いでは、木造3階建ての旅館しか建ててはいけなかった決まりになっています。旅館街の端に「城崎大会議館」というコンベンションセンターがあります。県立の施設で、1,000人を収容できる会議場だったのですが、利用が少なく市に払い下げられました。市長は、劇団やダンスのカンパニーに貸すことにしました。私はたまたま、文化講演会で市に来ていて、職員に施設を案内されました。私は「相当頑張らないときついと思いますよ」と言いました。案内してくれた職員は、市民ミュージカルや市民劇をやっている、演劇大好き人間でした。市長とは中高同級生だそうです。私は諮問委員になってしまいました。

リニューアルでは、演台を取り払って小劇場仕様にして、巨大な稽古場も用意しました。1つの劇場、6つのスタジオ、25人が宿泊できるレジデンス施設、カフェテリア、台所などを設けました。施設は330日稼働しています。条例制定によりセンターに泊まったアーティストは町民扱いされ、100円で城崎温泉の外湯巡りをする事ができます。施設の評判は瞬く間に広がり、昨年度は世界23か国から100件以上の問い合わせがありました。

城崎温泉は志賀直哉の『城の崎にて』で有名に

なった温泉地です。逗留した文人にはいろいろな人がいます。文客を招いて逗留させようと、一幅の書で宿泊を無料にしたのです。旅館には書がたくさん残っています。これはアーティスト・イン・レジデンスの一例です。私が諮問委員をやっている1年の間に、地元の方と話をし、地元で見たこのないコンテンポラリーダンスやビデオアートなどにかけてみようという方向性も定まりました。旦那衆は「20年後、1泊2食2万円の旅館のシステムは続かない」と考え、海外の富裕層に長期滞在してもらおうことを目指して取り組んでいます。

一昨年、俳優でダンサーの森山未来さんが1か月滞在して、城崎の子どもたちと作品をつくりました。滞在するアーティストには、アウトリーチ（地域への貢献）活動をしていただいており、学校によっては授業開催を用意してくれるところもあります。子どもたちは、毎月のように世界最先端のアートに触れています。市内38の全ての小中学校では演劇教育をしています。

豊岡市は、市主催の演劇ワークショップを東京や大阪でも行っています。豊岡では演劇が無料で見られますなどと紹介し、コウノトリ米をお土産として持って帰ってもらいます。また、Iターンのパンフレットを渡し、移住というものを最後に売りつけます。私はこれを「羽毛布団商法」と呼んでいます。豊岡が開催するイベントには、最初から意識の高い層が来ます。特にアートや文化に関心のある層や移住を考える人たちがピンポイントで来てくれる。要するに、教育政策と文化政策をIターンの切り札にしようということです。

Iターンで成功しているまちには、ママ友同士がしゃべれるようなカフェやレストランが必ずあります。女性に好かれるまちづくりの視点が必要です。教育政策と文化政策のプライオリティを上げることに気がついた自治体と、気がついていない自治体では、10年後、20年後、大きな差がつくと思います。

私は現在の仕事を約30年やっていて、「文化で飯が食えるか」と言われ続けてきました。そう、文化で飯は食えません。しかし、飯が食えるから

といって地元に住んでくれたでしょうか。必要条件と十分条件を取り違えてはいけません。雇用は必要条件ですが、十分条件ではありません。足りないものを補っていくのが政策だとすれば、教育政策と文化政策の充実が必要です。

豊岡市では、小学校2年生なら現代演劇を、6年生が狂言を、4年生がクラシック音楽を無料で鑑賞できます。先述の城崎国際アートセンターでは、コンテンポラリーダンスや現代劇を無料で見ることができます。意欲のある子たちは、中心街の市民プラザで、プロの演出家の指導のもと、夏休みに演劇をつくったりしています。幅広く、次のステップを用意しているのです。

面白いのは、鑑賞やワークショップができる事業と、作品をつくる創造、作品の発信事業があることです。市では合併により、施設の分業化に取り組みました。近畿圏域で最古の芝居小屋とされる永楽館では、毎年秋、片岡愛之助さんの歌舞伎で大変なにぎわいを見せています。市民プラザは駅前にあるので交流施設の拠点に位置付けられています。施設がなかった市内日高町では、旧町役場を改装して、来年、小劇場をオープンさせます。私たちの劇団が移転する予定です。

国際演劇祭の拠点づくりも進めていきたいと思っています。国際演劇祭で有名なのはアヴィニョンのアヴィニョン演劇祭で、約1か月間で1,000の演目が上演されます。アート作品は20ほどですが、まちの小さな店舗に並びます。演劇祭は見本市的な機能も持っているのです。豊岡市でも取り組もうと、商店街の空き店舗の活用が検討されています。

2021年に開校予定の県立専門職大学は定員320人の小さな大学ですが、150人の学生ボランティアを見込んでいます。大学設置の段階から、地域との発展に関わり、空き店舗対策や観光客の誘致をやっという構想です。

また、今年度から演劇教育を幼稚園、保育園から県立高校まで広げ、コミュニケーション教育を実施、文化政策と教育政策を結びつけたまちづくりをしています。地域には伝統がありますが、どう現代性を持たせていくかが問題なのです。